

『震災復興が語る農山村再生 地域づくりの本質』

稲垣文彦ほか著

農業・農村領域 上席主任研究官 小野 智昭

震災復興とは何か、どうなれば復興なのだろうか、という疑問がありました。

「復旧」とは被災前の状態に復すること、「復興」とはその状態を越えることと、まずは理解できるでしょう。ところで被災地の農山漁村は過疎化・高齢化の中で被災前から経済も人口も右下がりの傾向でしたから、その右下がりの傾向線上に復せば復旧で、元の水準に戻ったら復興ではないか。しかも震災は低下傾向を10年早めるから、1段下がった傾向線を想定すべきではないか。ともに北海道南西沖地震（奥尻島）の復興研究で指摘されていました。

インフラや公共施設等の物理的「復旧」を越える地域開発が「復興」だとする見方もあります。これに対して、災害によって衰えた被災者および被災地が再生すること、一度衰えた被災者の「すまい」や「くらし」、被災地コミュニティ（「まち」「むら」）が再び盛んになることが復興であるという指摘もあります。阪神・淡路大震災の研究からのものです。

右肩下がり時代の復興の評価指標は何か、またどうなれば被災者と被災地の再生＝復興なのか。こうした疑問に有力な回答を与えてくれるのが本書です。本書の「震災」は、東日本大震災ではなく、2004年10月に発生した新潟県中越地震のことです。著者は、中越地震復興にボランティアとして関わり、現在は公益社団法人中越防災安全推進機構復興デザインセンター長である稲垣氏を含む同センターの5人です。著者らは、自らの実践の中から得た教訓を理論化しながら、震災復興のあり方、さらには農山村再生のプロセスを同書で与えています。

本書の第1章で著者自らが「復興とは何か」と問います。かつての「右肩上がり」の時代には、物的条件を元にもどせば復興につながった（復旧＝復興）が、現在の「右肩下がり」の時代には、それだけでは復興に至らない（復旧≠復興）。それはなぜか。人口や経済などの数値を指標に「豊かさ」を測ると、かつては物理的復旧によってそれらが以前以上に上がったが、人口減少社会では以前以上の状況に至らないのです。「右肩下がり」時代にはそれとは異なる別の指標で測るべきことを著者らは提案し、そのことを「軸（指標）ずらし」と呼びます。

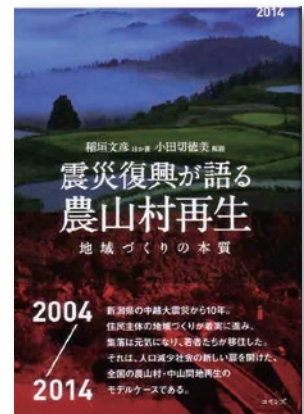
では別の指標とは何か。著者らが実践の中で得た回答は、震災による喪失感を補って、さらに得られる「復興感」です。その「復興感」はどうしたら得られるのか。

個人生活と集落維持というベースラインを整えた上で、地域住民が復興活動に主体的に関与する地域でこそ「復興感」が得られることが指摘されます。

では地域住民のその主体性はいかに獲得されるのか。震災からの集落コミュニティの再建、地域づくりには、将来ビジョンやプランの策定、事業の導入が必要でしょう。そのプロセスと住民の主体性について著者らは重要な提案をします。それが「地域づくりの足し算と掛け算」理論です。

プロセス当初は住民の主体的意識を醸成する「寄り添い型サポート」を、住民の主体性が生まれた後にはビジョン作りと実践を行う「事業導入型サポート」を、という段階的サポートが必要であるのだと指摘します。これは飛行機の離陸に例えることができるでしょう。飛行機は、滑走路を走りながら徐々に速さを増していき、その速さがある点を超えると機体が地上から浮き上がって、上空へと上昇していきます。離陸には地上での十分な助走が必要なのです。この助走の段階が「足し算」のサポートで、離陸直前からが「掛け算」のサポートでしょう。主体性の低い前者の段階では、専門家が関与して一部のリーダー層からの情報で活性化プランを策定しても住民の主体性は醸成されず、結局は地域づくりが進展しない。この実践から得た指摘は重い。

小田切明治大学教授が本書「解説」で言うように、本書は理論書であり実践書です。中越地震からの復興を論じた本書は、東日本大震災からの復興、さらには農山漁村再生への実践的提案であるとともに、それらへの政策的支援のあり方にも重要な示唆を与えるものといえます。



『震災復興が語る農山村再生
地域づくりの本質』

著者／稲垣文彦ほか

出版年／2014年10月

発行所／コモンズ